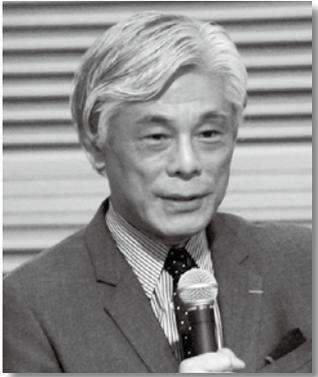


# 世界文化遺産、富士山と三保の松原 登録実現までの道のり



6月22日、カンボジアのプノンペンで開催された国連教育科学文化機関(ユネスコ)の世界遺産委員会で、富士山の世界文化遺産登録が決まった。一度除外勧告を受けた三保の松原の登録が実現した要因は何だったのか。外務省の出身で、ユネスコ大使などを歴任、2007年には石見銀山の世界遺産登録にもかわり、今回もロビー活動に尽力した近藤誠一氏が語った。

## 講演：近藤 誠一 氏

### ● 前文化庁長官

1972年外務省入省。在米国大使館公使、経済協力開発機構(OECD)事務次長、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、ユネスコ世界遺産委員会日本代表、駐デンマーク特命全権大使などを経て2010年より文化庁長官。13年7月退官。

### 文化遺産としての富士山

日本は世界遺産条約が採択されて20年後の1992年に条約を批准し、その際、真っ先に富士山を自然遺産として推挙しようと動いた。94年には衆参両院において請願を採択したが、開発が進行していることや、ごみ処理の問題、地質学的・生態学的な価値が不十分などの理由により、03年には自然遺産としての候補地から外れた。

一方、富士山は日本の文化と密接な関係があることから、95年より、文化遺産としての検討が開始されていた。そもそも「文化財」とは人間による文化的・芸術的な作業の所産であるが、富士山は日本人が作ったものではない。そこで、文化遺産の登録基準を徹底的に研究した上で、「富士山は、万葉集の歌や浮世絵などの日本人が作り出したさまざまな芸術や文学作品と極めて実質的な関連のある特別な存在」と主張することとした。

日本人は、欧米人に比べ目に見えないもの、音に聞こえないものに価値を見いだすという特徴がある。こうした日本の精神はこれからの世界に必ず役に立つ、富士山が文化遺産登録されることにより、日本の文化、日本人の精神性や思想への理解が深まるきっかけに

なる、という思いで、富士山の価値の表明を目指した。

### 「目に見えぬリンク」 という主張とロビーイング

当初国際記念物遺跡会議(イコモス)は、富士山は「信仰の対象と芸術の源泉」として登録を認めるが、三保の松原は富士山から距離が離れているため除外するとしていた。これに対し私たちは、三保の松原からの富士山が、山・松・浜・海という富士山を表す典型的な情景であり、物理的に離れていても、日本人の精神性、芸術性においてつながっている「目に見えないリンクがある」と主張した。

これについて、長きにわたり信頼関係のある世界遺産分野の専門家に意見を求めたところ、「日本が主張する『目に見えない価値』は、議論する価値がある。目に見える、科学で説明できるものしか認めないのは行き過ぎている」などの理解を示し、日本の主張をサポートすると表明してくれた専門家もいた。

そこで、6月のユネスコ世界遺産委員会で、原理原則に忠実な委員の方々に会い、この日本人の持つ特性について繰り返し説明をした。日本人がそこから浮世絵や万葉集などの素晴らしい文

化を作り上げたことについてポジティブな評価をしてもらいたいと主張した。政治的な駆け引きはせず、誠心誠意、専門的議論でコンセンサスを得るという姿勢に徹し、「本当に反対であるなら、諦める」と伝えた。

ある委員が「専門家との議論の結果、富士山と三保の松原の關係に科学的・客観的な証明ができなかった。従って積極的なサポートはできないが、日本人が心の中で一体であると言うならば、それをとやかく言う立場にない。誰かがサポートするなら、私は反対しない」と言ってくれた。

当日の審議では、厳しいと思われていた国の委員が、真っ先に手を挙げ、「三保の松原を入れるべきだ」と主張してくれた。そのおかげでいい流れができ、すべての国がサポートしてくれて、富士山と三保の松原の文化遺産登録が実現した。

### 伝統文化に 象徴される日本人の精神性

日本人は勤勉性、緻密さ、時間厳守、組織力、連帯力といった特性を活用し、近代国家を築いてきた。日本人の文化と思想には、一つに人間は自然の一部という自然観、また黒白や善悪をはっ

きりせず、あいまいなまま受け入れるという発想、そして目に見えぬものの価値を認識するという三つの特徴がある。これらは近代化とは相いれず脇に追いやられた面もある。ただ、日本人の心の奥には絶えず残っており、伝統や文化が守られてきた。

平安時代に書かれたという『作庭記』には、「庭造りは自然の言うがままに」とある。世界遺産に登録された平泉の毛越寺庭園はまさにそれである。一方、ベルサイユ宮殿の庭は直線や完全な円で構成され、左右対称を成し人工的な美を追究している。こうした庭に見られるような日本と西洋の美意識の違いは、楽焼とティーカップの形状にも表れている。

『御伽草子』に描かれた付喪神は古道具が妖怪化したものだが、ものへの愛着、供養という感情が込められている。ものにも魂があり、使い古したものに対して恩を返すという感覚は、欧米人より日本人の方が強いだろう。戯曲『夕鶴』は、動物が自身の意思で化身して人間に恩を返すが、こうした物語は欧米にはあまりなく、むしろ動物を人間より下位に見ている傾向がある。

このような日本人の自然観が、自然への敬いや他者への思いやり、多様性の受容といった価値観につながっていく。

また、能や歌舞伎、狂言、文楽など伝統芸能では黒白、善悪が明確に区別できない物語が描かれている。例えば狂言『宗論』では、宗派の異なる二人の旅の僧が論争し合ううちに歌い踊り出

し、気が付くと互いの宗派の経を唱えていて、宗派の違いという狭い議論をしていたことがばかばかしくなり仲直りする。また文楽『勢州阿漕浦』では、母親の病を治したいがために息子の平治は殺生禁断の阿漕浦で病に効くといわれる魚を密漁する。その網には三種の神器の一つ、宝剣がかかる。しかし、その行為が見つかり捕らえられるのだが、平治を捕らえた男がかつて平治の父親に世話になっていたことが分かり、恩を返すはここぞと男が平治の身代わりとなって刑に処される。まして、代官もその事情を知った上で処罰する。

おそらく、正義に基づかない義理と人情のこうした話は、欧米人にはなかなか理解できないだろう。日本人は黒白付けず、敵味方をはっきりと区別しない。現実の世界には善と悪とが共存していることを正面から受け入れ、あいまいさを受容する。

西欧の絶対的な正義は、時に、勝つためには手段を選ばない戦いにつながり憎悪の連鎖を招いてしまう。対して日本は正義より、秩序や平和を重んじる。三方一両損という言葉があるように、それぞれが少し我慢をして平和を保つ。物語の裏には現実世界のモラル・コンフリクトへの対処の仕方がうかがえる。

### 日本人らしさは 世界で重要な役割を果たす

このような目に見えない価値観、日本人の精神性は、近年、思わぬところ

でも発現した。東日本大震災の被災者が被害に遭いながらも現実を受け入れ、冷静だったことだ。極限状態の中でも、お互いを思いやり、いたわり合った。自然を受け入れる気持ちがあるからこそ、モラルある行動が取れたのではないかと思う。

踏み込んで考えれば、自然遺産でなく文化遺産として登録された背景には、富士山を触媒として、素晴らしい自然観、芸術性、信仰心を作り上げてきたことがポジティブに評価されたと解釈することができる。

さらに、一般的な対日観も見過ごせない。日本人は真面目で努力家であり、非西欧で初の近代化に成功した。優しく律義な国民性であり、ODAでも相手国の状況をよく考えてくれる。日本文化の人気とその奥にある日本人の思想やモラル、そして高い精神性への好感度が、「目に見えない価値」の理解につながり、三保の松原登録の賛同要因の一つになったのではないか。

日本は今、元気がない。元気を取り戻すには、日本人一人ひとりが伝統文化に込められたメッセージを学び、日本人らしさを見直すことだ。日本人らしさが憎悪の連鎖を防ぎ、環境問題を解決するなど、これからの世界に重要な役割を果たす。今回の文化遺産登録が、長年培ってきた精神性と西欧合理主義とのバランスが取れた国づくりを進め、それをモデルとして世界に示す機会となるはずだ。

### 質疑応答

**Q** 世界遺産の推薦に関して、他国とロビイングの違いはあるか。

**A** 推薦する候補に、いかに登録基準に合った価値があるか、より理論立てて実証しなければならぬ。これは日本人にとってあまり得意なことではない。英語やフランス語のような論理的な言語で、基準に照らしてまさに裁判

をするかのように理論を積み上げていかなければならぬからだ。最終的には、委員の価値観に合うものだという事を説得しなければならないが、私たち日本人にとって大事なことは、従来の基準では測りきれない日本文化の良さや目に見えないものの価値があるということを中心として主張し続けていくことだ。それがやがて世界から賛同を得ら

れるようになるかもしれない。今後もあるあるな局面で中長期的に取り組んでいきたい。

**Q** 次の候補はどこか。

**A** 群馬県の富岡製糸場だ。イコモスが9月に現地調査し、来年6月にカタールで開かれる世界遺産委員会で審査する。その次は長崎県の教会群とキリスト教関連遺産等が候補となっている。